

報告 1 「私たちが見た民族浄化の証拠」

国際学部助教授 生田 祐子

ーボスニア・オマルシュカ強制収容所体験者の証言ー

はじめに

東欧バルカン半島アドリア海に面するクロアチア共和国と内陸部のセルビア共和国に囲まれるような形で位置するのがボスニア・ヘルツェゴビナ（以下通称のボスニア）である。ボスニアは、日本では現在イビチャ・オシム監督の出身地として知られる。この国において、20世紀で最も残酷であった第2次大戦中のナチスによるホロコーストに等しい「民族浄化」(Ethnic Cleansing)と呼ばれる組織的な民族の大量破壊（ジェノサイド）が繰り返された。それは、今なお世界各地で内戦が続発する時代であっても、鮮明に記憶されている悲劇である。

1995年11月アメリカのオハイオ州デイトンにおいて和平協定が結ばれ（正式調印は12月パリ）、1992年から3年半続いたボスニア戦争に終止符が打たれるまでの犠牲者は、死者20万人、故郷の町や村を追われ、難民、避難民になったのは220万人（当時の人口の半分）といわれる。しかし、ボスニア東部のスレブレニツァのメモリアルパークが2005年アメリカの援助で完成した以外、戦争の記録を見る場所は未だになく、現在もお戦争犯罪の事実を検証する作業がICTY(International Criminal Tribunal for the former Yugoslavia)＝旧ユーゴ国際戦犯法廷で続いている。ボスニア戦争はまだ過去の歴史ではない。

2006年8月文教大学国際学部の学生14人と、クロアチア及びボスニア・ヘルツェゴビナを訪れた。戦争でいまだ難民状態にある人々あるいは故郷の町に戻ったもののかつての生活からは程遠い苦しい生活状態にあるいわゆる帰還難民と呼ばれる人々のために、ささやかなボランティア活動を行うためである。この折に、民族浄化のための拷問とレイプという最も非人道的な犯罪が行われたことで知られているボスニア北西部にあるオマルシュカの強制収容所で地獄の苦しみを味わいながらも生還できた2人の証言を直接取材する機会を得た。彼らの証言を中心にボスニア戦争における民族浄化の実態について、報告したい。

1. ボスニア戦争の背景

旧ユーゴスラビア（ユーゴスラビア連邦人民共和国）は、7つの国に囲まれ、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字、1つの国家として、多民族が共存して平和に暮らすことができる社会主義国家として、他に例をみないユニークな存在であった。しかし、1980年に絶対的リーダーであるチトー大統領が亡くなったあと、異なる民族間でくすぶっていた不満が広がり、民族主義が台頭した。

その結果、1991年にまずスロベニアが独立を宣言、ついでクロアチアも独立を宣言した。それに伴い、1992年にボスニア・ヘルツェゴビナも独立を望んだ。しかし、独立を支持するイスラム教徒のムスリム人（宗教と民族を区別するために、英語と現地語ではボスニアクと呼ぶ）とカトリック教徒のクロアチア人に対して、少数派に陥ることを恐れて独立を望まないセルビア人の対立が激化、セルビア共和国の支援を受けるボスニア内のセルビア人勢力は、ムスリム人が暴動を起こしているとメディアによる宣伝戦を始め、セルビア人以外の人たち（ムスリム人とクロアチア人）を各家から引き出し、強制収容所に送り、同時に各地で家を焼き払うなどの暴行を繰り返し、大量の虐殺を行う結果になった。いわゆる民族浄化である。

2. オマルシュカ強制収容所

ボスニア北西部の都市プリエドールの郊外に位置するオマルシュカの鉄鉱山施設は、戦争当時、ボスニアク（ムスリム人）を強制的に収容し、大量虐殺が行われた場所である。現在もハーグのICTY法廷で戦争犯罪の審理が続いている。「オマルシュカ」、それは戦争末期に大量虐殺が起きたことで有名なボスニア東部の町スレブレニツァと並び称される悲劇の代名詞ともなっている。私たちがオマルシュカを訪問した8月の午後、労働者たちの勤務する姿が見えるごく普通の鉄鉱精錬所の風景が広がっていた。看板や説明書きはおろか、悲惨な戦争の傷跡を偲ばせるものは何もなかったこと事態がとても異様だった。しかしこの施設こそが戦争初期に非人道的な行為が日夜繰り返された場所だった。

その事実、施設内への立ち入りがICTYの管轄下にあるということに伺えた。恐らく民族間の対立の再燃につながるような刺激的な行為は極力抑えること、また悲劇的事件現場の保存などが目的とみられる。このオマルシュカ施設の訪問が可能になったのは、2005年夏から文教大学のために現地活動の調整並びに通訳として協力してくれているセルビア人青年、イゴール・ソビルグさんの多大な尽力のおかげだった。イゴールさんによれば、入場許可をとるのは困難を極め、何度もアムステルダムにあるICTY事務局とファックスによるやり取りをした結果、メディアのような報道目的ではなく、教育活動のためにということで、許可が降りたとのことであった。

この鉱山施設への強制収容が始まったのは、1992年4月30日。セルビア人勢力によるプリエドール支配と同時だった。この時期にボスニア北西部では、オマルシュカ(Omarska)、ケラテルム(Keraterm)、トルノポリエ(Trnopolje)の3カ所に収容所が作られ、8月20日までその活動が続いた。いずれも非セルビア人であるボスニア人、クロアチア人が対象だった。オマルシュカ収容所だけで、総計で4000～5000人が送り込まれ、その多くが生きて帰ることはなかったという。

3. 地獄の目撃者

イゴールさんの尽力は収容所への立ち入り許可の取得だけではなかった。彼は、収容所からの数少ない生還者のうちの2人を証言者として現場で立ち会う手はずまでしてくれていた。そのうちの1人、ボスニアク男性のラザック・フカノビッチさん(47)はオマルシュカの悲劇をその著書を通して訴えた人として、世界的にも知られた貴重な証人であ

る。またもう一人の立会人ミルサッド・ドウラトビッチさん（27）は強制収容された人の中で当時最も若い16歳だった。

ラザックさんは、戦前リエドールの放送局に勤めていたジャーナリストであり、戦後難民として滞在したノルウェーで、“*The Tenth Circle of Hell*”と題した回想録を執筆、オマルシュカでの虐殺と拷問の真相を世界に知らせた。2005年単身でリエドールに戻り、自ら放送局を運営する一方で、証言活動を行っている。これは加害者側であったセルビア人からは決してよく見られることはなく、今なお車に爆発物を仕掛けられるなどの嫌がらせや脅迫が続いているという。このためもあって、身の安全を確保する意味でも、家族はノルウェーに残ったままだ。

ラザックさんの回想によると、オマルシュカに送られることになった朝、突然セルビア兵が自宅に来て、「ボスニア人たちが暴動を起こし始めたため、一時的に皆さんに退去してもらいたい」と告げられた。女性と老人たちの大多数はバスで程遠くないクロアチアへと国境を越えて追放され、男性と少数の女性がオマルシュカに収容された。

オマルシュカ鉱山施設に到着すると、中心部にある平屋建ての白い建物（通称：ホワイトハウス）にまず連れてこられ、職業等の身元確認が行われ、その後瀕死状態に陥る拷問を受けた。即死した者の死体は外に積み上げられ、どうか生存できたものは、敷地内の他の建物に移された。ホワイトハウスの中には、60平米くらいの3つの部屋と、シャワーとトイレが一緒になった狭いバスルームだけだったが、この小さな建物の中に常時200人もの男性が閉じ込められた。当時、床は血で真っ赤に染まったまま。食事や排泄の機会なども十分に与えられず、人間としての尊厳が完全に剥奪され、人びとは家畜同然に扱われた。まだ少年であったミルサッドさんはここにあるトイレ内に収容され、日中は夏の炎天下で座らされ、一滴の水分も補給されないことが続いた。このため、遂に自らの尿を瓶にとり飲料にする人もいたという。

ホワイトハウスから他の建物に移ってからも事態は改善しなかった。空腹を我慢できず、セルビア兵に食べものを求めた少年が、その場で射殺される場面にも遭遇した。また、親子（息子と父親）を見つけると、親または子を殺させることを強要し、従わなければ両者とも銃殺するという、最も非人道的な犯罪行為も行われた。ラザックさん自身17歳の息子が同時に収容されていたが、この難から逃れるために最後まで息子との接触を断ち、親子関係の発覚を何とか免れた。収容者はセルビア兵に靴やライフルなどで殴られる虐待を受け、壁に向かって整列してセルビアを讃える歌を歌うことを強制され、水分の補給なしに長時間作業することが日常だった。その行為を拒否する者はその場で殺害された。

連日のように、収容所に送られてきたのは、主にボスニア人で、比較的高学歴の医者、教師等知識人、兵士になる可能性のある働き盛りと少年達がその多くであった。3カ月間の間に総計5000人近くが収容されたが、誰もがこのようなところへ送られる事態は予想できず、あつという間の拘束と連行で、気がつけばこの収容所にいたと回想する。10代の若者も多くいたが、ミルサッドさんの兄弟、家族を含む知り合いは全員殺害されたと

¹ Hukanovic, Rezak(1993) *"The Tenth Circle of Hell: A Memoir of Life in the Death Camps of Bosnia."* London: Abacus, A Division of Little, Brown and Company

いう。ラザックさんは、ホワイトハウスでまる 1 日拷問を受けた後、他の建物に 16 日間収容され、国際機関の調査が入る幸運から別のキャンプへ移されたが、その途中でも息を絶える人が相次いだ。ラザックさんはすべてを目撃して最後まで生存した数少ない証言者である。

女性は多くがバスで国外に移動させられたが、男性と同様、教育のある人たち、主として法律家、医者、教師などの高学歴の女性 3 4 人がオマルシュカへ連行された。生存した女性たちが証言活動をしたドキュメンタリーフィルムが公開されているが、その中で、幼なじみで法律の専門家だった 2 人のムスリム人女性が、セルビア軍の捕虜収容所オマルシュカでの地獄の体験を世界に向けて訴えて出た。その結果、ハーグの国際戦争犯罪法廷が収容所内で行われたレイプを戦争犯罪として初めて裁くことにつながった。

この収容所での体験をラザック氏が執筆したのが、“*The Tenth Circle of Hell*”である。“*The Tenth Circle of Hell*”とは、13～14 世紀のイタリア詩人ダンテが描いた「神曲」の中では地獄は 9 層あるが、それよりひどい地獄があるということで、10 番目の地獄と題したのである。ラザック氏自身の体験を第 3 者の立場で書いた回想録である。この本に寄せた序文の中で、アウシュビッツからの生還者でノーベル平和賞を受賞したアメリカのエリー・ウイーゼル (Elie Wiesel) 氏は次のように書いている。「ダンテは、間違っている。地獄は 9 つあるというが、このオマルシュカを忘れている」。ラザック氏があえて第 3 人称の立場で体験を描いているのは、彼自身の主観的な感情を可能な限り押さえた描写を可能にしているのではないかと考えられる。

4. サンスキモースト身元確認センター

戦争中、セルビア軍により殺害された遺体の多くは、山中に埋めて隠されたため、現在でも捜索活動が続いている。サンスキモースト身元確認センター長であるニアツ・シバッチ氏が、私たちの訪問を許可し、捜索で見つかった遺体が収容されたセンターを見せてくれた。このセンターでは、ICTY の協力を得て、殺害された身元不明の遺体を DNA 鑑定し、家族の情報と合わせて、身元の確認を行っている。上部から光がさしこむ窓のある体育館のように広大なこの場所には、棚にはまだまだ先になる検死を待つ遺体が袋に入れたままで並び、床一面には現在検死確認中の白骨化した遺体がシートの上に並べられ、着衣や携帯品が遺体の傍に置かれていた。家族が遺品から身内のものだと確認すると、DNA 鑑定で血縁関係をたぐっていく。シバッチ所長の説明によれば、遺体の身元確認だけではなく、どのようにして殺害されたかという犯罪行為そのものを特定していくことも重要な作業だという。ボスニアには全部で 5 つの遺体身元確認所がある。サンスキモーストのセンターでは、ボスニア北部プリエドール周辺から見つかった 875 体が安置され、これまでに身元が確認できたのは、229 遺体。残る 646 遺体については、確認作業中あるいは、これから先のことになる。現在では母方だけではなく、父母両方のいとこまでの DNA から判別が可能である。ボスニア北部地域でこれまでに収容されたのは 613 カ所で見つかった 3561 人分の遺体である。

最後に

1995年7月11日、ボスニア戦争末期、国連が安全地域と定めた地域のひとつ東部セルビアとの国境に近いスレブレニツァの町をセルビア軍が総攻撃をかけた。たった1週間で約8000人の男性と少年が殺害された。女性、子供、老人は、バスでスレブレニツァ郊外へ追放された。この殺害に命令を下したセルビア人勢力の指導者ラドバン・カラジッチと軍事活動の責任者ラトコ・ムラジッチ将軍は、ICTY(旧ユーゴ法廷)から起訴されているが、現在も逃亡中である。オマルシュカを含むボスニア各地で起きた虐殺の事実が国際社会に伝わっていたにもかかわらず、スレブレニツァの悲劇をなぜ防ぐことができなかったか。ボスニアの人たちの間には、国連平和維持軍が駐留していたにもかかわらず、なぜスレブレニツァがこんな目にあっただのか、どこにもぶつけられない怒りがくすぶっている。しかしセルビア人に対して許せないと言う感情ではなく、むしろ国際社会、国連への反省を促しているものにとらえられる。現在のボスニアでは、民族の対立を何とか乗り越えて、かつてのように共存する国づくりの努力が行われている。多くの被災者たちは憎しみを持ち続けるのではなく、未来へ向かって気持ちをリセットしているように感じられることがあった。民族は違っても、今ではお互いに何事もなかったかのように通りですれ違い、時には言葉を交わす光景は普通に見られる。

私たちが訪問中に出会ったのは、ボスニア側の被害者たちだけではなく、文教大学で募った支援物資の一部のパソコンを寄贈したNGOであるBread of Lifeの代表ダンコ・マレセビッチさんはセルビア人だ。このNGOは主にムスリムやクロアチア系の帰還難民のための食糧支援や教育、職業訓練を行っている現地NGOである。マレセビッチさんは徴兵されて戦闘の前線に配置された。しかし宗教上の信念からも人を殺す役割を断固拒否、護身用のピストルの携帯も拒否したことから、食料調達係りにまわされた。彼のように多くのセルビア人たちは人を殺したくて戦争にかかわったわけではないことも確かである。文教ボランティアズと行程を共にしたチャーターバスのセルビア人運転手はスレブレニツァ陥落時、攻撃基地となった近くの町グラタナツツにいた。スレブレニツァ陥落は彼には加害者側としての大きな苦しみを与えていることを告白した。私たちを乗せたバスを運転して入っていったスレブレニツァの町の中では、まだまだ多くの家が破壊され、廃墟となったままだ。いつも温かな笑みを浮かべていた運転手も苦しんでいることはその表情に表れていた。

スレブレニツァの犠牲者を埋葬する平和記念公園の中央部に大理石の碑が立っている。3面体の碑にはボスニア語、アラビア語、英語で祈りが書かれている。それはNo More Hiroshimaにも通じるような人類共通の祈りともいえる言葉である。

We pray to Almighty God,
May grievance become hope!
May revenge become justice!
May mother's tears become prayers.
That Srebrenica never happens again.
To no one and nowhere.
全能の神に祈る。

悲しみは、希望に

憎しみは正義を望む心に

母の涙は祈りに変わりますように。

スレブレニッツの悲劇は世界の誰にも、どこにも繰り返されませぬように。

(生田祐子訳)